緑のふるさと協力隊活動報告（文／伊藤真之）

鮫川村で暮らして

緑のふるさと協力隊として昨年４月に鮫川村にやってきた伊藤真之さん。３月12日、無事１年間の任務を終え、村を旅立ちました。

広報さめがわでは、毎月「時の流れに身をまかせて」と題して、彼の鮫川村での体験記をお伝えしてきました。今回、１年間の活動をまとめた報告書が完成しましたのでご紹介します。彼の目には鮫川村はどう映ったのでしょうか？

協力隊参加の動機

特にやりたいこともなく、ただ日々を過ごしているだけの大学生活にどうしても納得できていなかった在学中、なんとなくこの協力隊の説明会に参加し、その時すぐに参加を決意しました。大学を一年間休学しての参加となりましたが、「今」参加することに意味があると思ったので、大学卒業後ではなく休学しての参加を選びました。今までの僕の生活とは全く別の環境で生活し、豊かな自然環境や生き物、人に触れることで、自分が変化することを望んでいました。自己確立、自分探し、そんな言葉で表してもいい参加の動機でした。

一年間、実際に協力隊として鮫川村で活動し、来る前に自分が求めていたことと現実は、全く違っていました。理想と現実のギャップ、それに苦しんだ時期もありましたが、なんとか一年間活動することができました。テレビやマスメディアでの農村の情報ではなく、また短期間の農村体験でもなく、実際に鮫川村という土地で一年間暮らしたということが何よりも、この先の僕の人生でとても大切な日々を過ごせたようにも思います。まだ、日々の活動で止まることのない流れに流されて生活してきたような思いもありますが、それが鮫川村を離れた後には何か自分の中で筋の通ったものになっているような気がします。

東京鮫川会ふるさと探訪ツアーで訪れた人たちと一緒にそば打ち体験

四季を感じて

季節の移り変わりが目に見える、そんな風に鮫川村で暮らして感じた一年でした。川崎市で生まれ育ち、田舎もなく、ずっとそんな環境で育ってきた僕には目に見える自然や田畑の変化が新鮮でした。

春は田植えの季節でもあり、村中のどこの田んぼでも作業している人がいる。その季節に合わせ、みなが同じことをするということは季節とともに生きることでもあると思いました。それから夏にかけてはカエルの鳴き声が毎晩住宅の隣の学校田から聞こえてきました。騒がしいと思う日もありましたが、だんだんと夏が過ぎ、減っていくその鳴き声には寂しいものがありました。そのカエルの鳴き声のこともこうして原稿を書いて久しぶりに思いだし、今は何も音のない田んぼに生き物すらいないのだろうと思うと、夏の騒がしさが本当にあったのかどうかすら疑ってしまうほどです。

大豆畑での作業

初夏には蛍が舞っていました。昔に比べると数が減ったといわれる蛍ですが、僕にとっては一匹の光りを見ているだけでとても感動しました。夏の夜、鹿角平の天文台のところで見た星空。数分おきに星が流れ、天然のプラネタリウムのように感じました。都会では星が遠く、数個しか夜空に星は見えません。同じ空なのにこんなにも違うと思い、その空しか知らずに育ってしまう人たちもいるのだろうと思うと、少し残念な気持ちにもなります。

冬の凍てつくような寒さも初めてで、家の中が凍るという経験や、ガスがなくなり水のシャワーを浴びることなど都市ではあり得ないことです。こうした何気ない鮫川村での日常が、この先もう二度と得ることのできない経験でもあると思います。

今までほとんど触れることのなかった生き物に触れたり見たり、それも季節によって出会える生き物が違ってくるということも生きるということなのだと思います。鮫川村という農山村で暮らしていると季節ごとの山や木々の色づきや、生き物でその季節を教えてくれます。それが都市では季節を彩るものがあまり見受けられず、その替わりに人工的に彩ったり、新聞やテレビがその季節の情報を伝えます。それは本当の意味で四季と共に生きることではなく、そう感じさせられているのだと、鮫川村に来て思いました。

赤坂西野地区・ふるさと相撲大会に力士として参加

農業

農業は体験で経験したことがありましたが、本格的にというか農家さんと〝農業〟をした

トラクターを使って耕起作業

のは初めてでした。鮫川へ来る前は農業こそが自然との共存だとか、人間の本来の生き方だとか思っていましたが、いざ、農家さんと活動してみて、その容易でなさを身をもって感じました。農業は〝農〟でお金を稼ぎ、生計をたてるということ、多くの収量を得て利益を上げなければならないこと。農業は仕事であるということすら、僕にはわかっていなかったのだと思います。実際に僕も大豆を作らせてもらいましたが、その容易でなさが少しだけわかった気がします。

体験の農業と仕事としての農業は違う。そんな理想と現実の埋め合わせができたことも大きいと思いました。今まで触れることもなかったことにも多く触れられました。鮫川では、誰でも当たり前に使いこなせる草刈り機も初めて使い、こんなものがあるのだと初めて知りました。農業は博打だと言っていた人もいました。農業と言っても、やり方も人それぞれで、その年々や気候によって、毎年変化させなければならない。判断のつきづらい農作物は人の思いと逆に育ってしまう場合もあり、平均した収入が得られない場合がある。

農業は自然との共存でもあると思いましたが、それと同時に目に見える自然破壊でもあると感じました。農薬の使用や田畑を耕すことで、その土地の生態系を少なからず壊し、生き物の居場所を奪ってしまう。こう書くと表現が悪いかもしれませんが、そうしなければ何よりも僕たち人間が生きてはいけないということを学びました。たくさんの犠牲を伴って僕たちの口に入るものが作られていることを、自分もそういう立場として活動してみて、すべてではないがわかった気がします。その犠牲を無駄にしないように生きることも大切だと思いました。誰が作っているのかわかる野菜を食べることの安全性と信頼。そう考えると、どこで誰がどのように作っているのかもわからないようなスーパーの野菜を口にすることに、少なからず抵抗を感じるようになりました。農業も大量生産でなければ食べてはいけないこと、大型機械で多くの田畑を耕して、多くの収量を得なければならない。今の時代、農業を昔のようにやっていたら経済的に生きてはいけませんが、でも、その方が

ポットに土を入れる作業

土や自然にもっとも近い存在だったのかもしれません。農業が他のさまざまな仕事の中で一番変化した、そう感じるようになりました。

まめで達者な村づくり

鮫川村は「まめで達者な村づくり」として大豆で村おこしをしています。最初に豆と聞いた時は、少し地味な印象を受けましたが、その政策があるからこそ、鮫川村が生き残っていることを生活の中で感じました。他の農村地域をあまり深く見たことはないですが、鮫川ほど村の中で循環した村づくりができている地域はあまりないのだと思います。

大豆などの種子配布

合併せずに村が生き残る方法が豆を使った村おこしであり、それにより、年々業績を伸ばしている。農村暮らしというのは、自然豊かな緑の中でゆっくりと過ぎてゆくものだと思っていましたが、そんなことはありませんでした。鮫川村があり続けるためには本当に多くの労力が必要となるのだと学びました。これからも豆を生かした村づくりを進めていき、よりよい村として鮫川村が存続し続けることを願っています。

その「まめで達者な村づくり」の拠点として手まめ館があり、多くの人が足を運びます。大豆の加工品は何よりも村民に買ってもらうために設定した料金であり、村外からもたくさんのお客さんが訪れます。地産地消でもあり、そうすることで村の中での循環も多く生まれます。村の中での循環と共に地産地消にも繋がり、鮫川の野菜が給食にも多く使用されている。また、こどもセンターでのおやつも手まめ館へ委託したりと、都市ではあり得ないであろう農村ならではの循環が生まれたのだと思います。合併せずに村で生き残ると言うことは、鮫川村独自のやり方で色を出し、他の地域に負けない村づくりが必要となってくる。そのため、合併しない村づくりとして、村民のために精一杯動いている人々の力が大きいと思いました。野山に囲まれ山の上に存在する鮫川村は、他の地域の人が通りすぎることのない、ある意味閉鎖された土地です。そのような環境だからこそ、村内での持ちつ持たれつの関係がつくり出した、「鮫川村民のため」という考えがあるのだと思いました。

手まめ館をＰＲ

知るということ

農村で暮らしていると今ま

で知りもしなかったことにたくさん出会えました。例えば作物であったり、鶏の卵であったり、それらは僕にとってはスーパーで売られていることが当たり前でした。でも、それらには必ずスーパーに並ぶまでの過程があり、そこには手間暇が存在する。そんなことすら今まで考えたこともなかったですが、鮫川で活動しその過程を目にするととても大変なことが多いと感じました。鮫川のような農村地域で暮らしてきた人は、生まれたときから当たり前にみんな知っていることを全くと言っていいほど知らずにいたことに少し恥ずかしく思いました。でも、もし鮫川に来ていなかったら一生知らずにいたかもしれないことを知ったことに大きな意味があったのだと思います。これから僕の生活で、それを知っているからこそ視野も広がったりしていくのだと思います。

味噌仕込み

協力隊の1年間とこの先

この一年本当にいろいろな経験をさせてもらいました。何をしたというよりもこの鮫川という場所で一年間誰も知り合いのいない中、生活したことが何よりも自分の中で得た物だと思います。毎日が忙しい活動で、色々な物事に対して深く考える時間もなく、鮫川でのペースで一年間過ごしてきた気がします。だからこそどっぷりと鮫川に浸り、感じられたことも多くあるのだと思います。もっともこの一年の成果を感じるのは鮫川を離れた後、協力隊としての活動が終わって、自分の元いた場所で過ごすときに活きてくるのだと感じます。今は何が何だかがよくはわからない状態でもあり、この生活が終わることも信じられなくて実感もほとんど湧かないというのが本心です。自分がどう変わって成長したのかは自分ではなかなかわかりませんが、それを感じるのもこの後の一年間がこの一年間と合わせて、僕の人生でとても大事な時期になるのだと思います。

協力隊終了後は、半端にしてあった大学へ復学します。鮫川へ来る前から行く理由すらわからなく、でも辞めることに踏ん切りがつかなかった大学ですが、卒業することにしました。それも、多くの人の僕を思う気持ちや、説得のおかげでもあり、親心でもあり、それに応えるためにも、大学を出ることが恩返しにも繋がるのだと思いました。

ユースカレッジ・門松づくりに挑戦

「自分のやりたいことをやるには、やりたくないことを一人前にできてから」。そんな一般では常識とさえ思われることも知らずに、それを気づかせてもらった一年でもありました。まだまだどんな職業に就きたいという、将来の夢は白紙状態ですが、あと一年の大学生活と共に、鮫川村での多くの経験を生かし考えていきたいと思っています。一年鮫川村で暮らし色々な出来事がありましたが、何があっても一年間面倒を見てもらった手まめ館の人々をはじめ、鮫川村にはとても感謝しています。もっとしっかりとした姿をこの先見せられたらなとも思っていますので、そのときはよろしくお願いします。

こうして今までの生活からかけ離れ、見たことのない土地へ踏み込み、すべてがいいことばかりではなかったですが、このまだ若い時期にさまざまな経験ができたことが、これからの人生の糧になったように思います。協力隊として鮫川村で活動した一年はどんな職業の一年間よりも、大きな変化や、たくさんの経験を生んでくれるのだと思います。こうして一年間鮫川村で過ごせたことも、すべて鮫川村民のおかげです。その恩をまだまだ返せずにいますが、協力隊としての一年は終わりですけど、僕の人生はまだ続き、鮫川村も同じようにあり続けるのなら、その恩は徐々にでも還さなければならないと感じています。とても多くの人に支えられ、とても多くの経験と恩を受けた一年だと思います。

一年間とてもお世話になり、本当にありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。

こどもセンターで園児たちと一緒に過ごした思い出の写真